

比企の畑から・春

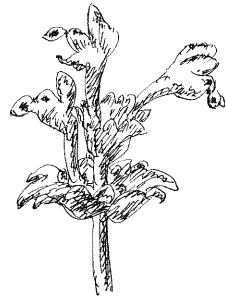
小宮山 洋夫

一昨年、埼玉県比企郡の鳩山町に仕事場を移し、畑を借りた。秩父山塊が東におわり、関東平野に移行する境界に、ヘソのように突き出た丘陵地に、鳩山の町は広がっている。

畑は、幸運にも、隣人の案内で、すぐ見つかった。丘の上にある畑の周辺には、集落が点在し、

その背後に、秩父の山並みが横たわっている。畑の近くに、古代、国分寺の瓦を焼いた窯跡がある。風景はしかし、古代から、弥生を突き抜けて、縄文の面影が色濃い。

仕事場から畑へは、自転車で十分ほどの道の



ホトケノザ

り。住宅地を抜けると、ほどなく雑木林がつづく地域に入る。昨年、その畑への道路でタヌキの死体に出会った。自動車にひかれたらしい。今年も見た。車が何ほどのものか、彼らは知らない。生活領域が、人間と重なると、悲劇が起こってしま

う。
そんな日本の原風景の中で、久しぶりに、大地を動かす。土の抵抗感がうれしい。

初年度の野菜の出来は、あまりよくなかった。それで、肥料について、多少の修正を考えた。しかし、思いとどまった。

二年目、めざましい生育振りを見せるようになった。方法の基本を変えなくてよかった。

「お上手ですね」

「いやー」

通りかかったおばあさんが、声をかけてくれ

た。

「ここは、野方だから」

「えっ、野方って、何ですか」

「痩せている畑ということ」

「はあ」

「イモは、よく育つけれどね」

そういえば、東京の中野に、野方という地名があったな、そうか、野方にはそういう意味があったのか。

「じゃあ、肥えた畑は、どこに」

「下の田んぼの側の畑」

確かに、田んぼに近い低地の畑は、水分、養分に恵まれ、菜っ葉類、ナス、キュウリなど、大半の野菜はよく育つ。他方、水はけのよい台地の畑は、イモ類、カボチャ、ラッカセイなどが、つく



コマツナ

りやすい。

どうやら、わが菜園では、どの野菜も、まずまずの出来なので、おほめの言葉にあずかったようだ。

早春の畑。

コマツナ、ホウレンソウ、シユンギクが、双葉を開き、その間から本葉が、顔を見せている。ネギが針のような芽を伸ばしている。

ジャガイモの芽が地上に姿を見せた。その傍らに、ハコベが白い花を咲かせている。

「ホーホケキョ」

「ホーホケキョ」

畑の南斜面は、

アズマネザサでおおわれている。その茂みの中で、ウ



ジャガイモの芽生え

グイスが鳴いている。絶え間なく、鳴く。

時折、

「ケ、ケ、ケ」とキジの鳴き声も、入り交じる。竹ヤブに、二組のキジの家族が暮らしているという。

隣人は、ほくに語った。

ヤブから家族が畑に出るとき、まず、雄（父親）が先に出て、あたりを見回す。次いで雌（母親）が子どもを連れ、姿を現す。

「雄は、一足早く身をさらし、注意を自分に引きつけることで、家族の安全を図っているようですよ」

どうやら、あの雄の身体の裝飾は、求愛のためだけではないようだ。キジのお父さんは偉い。キジはイモを掘って食べるといふ。ほくは、残念ながら、まだ、雌が一羽歩く姿しか見ていない。

春が深まると、コマツナ、ホウレンソウの収穫

が、忙しくなる。昨秋、こぼれ落ちたシソの種が、勝手に芽を出す。全く、シソは世話なしだ。カボチャが大きく厚い双葉を開く。



カボチャ

初期の生長のための栄養が、たっぷりつまっている、大切な双葉。

トウモロコシ、地這えキュウリ、エダマメの種をまく。

越冬した菜っ葉がとう立ちして、黄色い花をつけた。「菜の花畑の誕生」。その周辺に、スズメノエンドウが、赤紫のチョウ形花を、オオイヌノフグリは、美しい青紫の花を咲かせている。

気温の上昇に呼応して、ニラ、ワケギが、盛ん

に葉を茂らす。フキが葉を大きく掀げる。ネギが坊主をつけた。その株元を守るように、ナズナが花を開き、スズメノカタビラが、穂をつけている。



オオイヌノフグリ

冬の間、眠っていたタマネギが眼をさまし、背丈を伸ばす。秋、種をまいたサヤエンドウが花を咲かせ、実をつける。

鳩山には、「赤沼」「泉井」「小用」「須江」「奥田」「高野倉」など、古い村の地名が、地域名として残されていて、多くの想像力を刺激する。

わが菜園は「赤沼」にある。赤沼からは、ヤマタノオロチをイメージしてしまう。オロチとは大蛇のことだ。オロチは原自然のシンボルである。人間は、オロチを退治して、変容させ、文化を一つくり上げてきた。

オロチといえは、当地で何匹ものへびに遭遇している。雑木林や小山を散歩すると、山道を横切るへびによく出会う。

対面すると、一瞬、こちらの身体がこわばる。しかし、彼らは蛇行しながら、ゆっくりと逃げ去る。そのしなやかな動きを眺めると、畏怖の念を覚えずにはいられない。

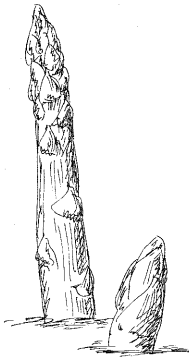
「まだ、自然は残されている」

「へびに会えるかぎり、まだ、大丈夫」

ほくは、思わず、つぶやく。

晩春、地中から、アスパラガスが、芽を出す。

シュンギク、ホウレンソウの収穫がおわると、オ



アスパラガス

クラ、ニガウリの種まき。

園芸店に、ナス、トマト、ピーマン、トウガラシ、スイカなどの苗が、出回る時期を迎える。トウモロコシ、地這えキュウリ、エダマメが、芽を出す。

ヨモギが畔道を一面おとした。スズメノカタビラ、オオイヌノフグリ、カラスノエンドウが、畑寄りの畦道に、入り交じって生育している。

そろそろ、ヨモギを摘む人の姿が見られるだろう。

(家庭菜園研究家)

カット 筆者